

現代英語学と英語学の現代(たぶん慶應的でたぶんとても井上のな)

井上 逸兵
(英米文学専攻教授、言語学)

スコラリオさんの話してくれた Samuel Johnson の「作者氾濫の時代」の話もおもしろかったですね。まさしく現代の SNS (英語では Social Media) が生み出した状況と似ていますね。印刷出版というメディアの革新が新しい社会を生み出したとも言えるのだらうと思います。そして、テクノロジー、メディアの変化は人々のことばをも変化させてきました。

さて、今回は英語学の話です。慶應義塾大学文学部英米文学専攻の英語学にはのちにお話いただく堀田隆一先生の philology と筆者井上の linguistics の二つがあります (当専攻の慣習として前者を「英語学」、後者を「言語学」と呼び分けることもあります)。実は、冒頭の Samuel Johnson の出版文化の話も現在の言語学系英語学の一分野である社会言語学における、「言語とテクノロジー」というトピックと関わりがあります。

井上が中高生くらいの時はまだケータイがなく、女の子に電話をしたければイエデンにしなくてはなりませんでした。おっかない (かもしれない) お父さんが出る (かもしれない) イエデンに電話をするということは、今なら発毛促進剤を買いに行くくらいの勇気がいりました。今はそんなに気を揉む必要はありません。便利なケータイがあります。でもその反面、私たちはなにかの能力を失っているかもしれません。ことばの働きも変わっているかもしれません。

日本の英語学は、欧米圏の多くのそれと同様に、「英文学」からの独立が始まりました。英語で書かれた文学から「文学的」要素を切り離し、「英語」という言語だけを取り出して観察するという研究の視点を、勇気あるヘソマガリたちが持ちだしました (偉大なヘソマガリです)。文学作品には評価がつきまといいますが、英語学、言語学は、人が生み出したことばに優劣はない、美しいとか優れていないとか四の五のも六も言わないという態度に徹しようとなりました。それは、話す人間の平等主義という思想めいたものと結びつけられたこともあります。

その後の言語学系英語学の現在に至る (たぶん) スリリングな展開については必修

科目「現代英語学」にとっておきましょう。今回は、そこはすっとばして言語学系英語学の今についてだけかんたんにお話ししておきます。

文学研究においてもその他の学問分野においてもそうですが、研究には理論があり、それは時代ともに変化し、また一種の流行のようなものもあります。言語学もその例外ではありません。そして、そのような流行は、だいたい世の中の動きや他の学問と連動しています。たまに一発屋みたいなのも表れますが、そういうのは大きな流れの中に飲み込まれていきます。象牙の塔にいるつもりでも塔に窓をつけて外を眺めていなければなりません。

現在の言語学系英語学には、大きくわけて二つの流れがあります（その他はとりえず無視します）。一つは言語を生み出す人間の知性とほどのようなものかという問いです。生み出された言語を観察するだけではなくて、言語を生み出すその根本、大元にある、種としてのヒトの能力を探究します。認知科学という側面をもっています。

もう一つの流れは言語を用いて人は他の人や周囲の事物とどう関わっているかという問いです。言語を用いて人間はどのような社会生活を営んでいるのか、それを可能にしているニンゲンの能力はどのようなものかを探究します。前者の言語学の流れが人間の内部を覗こうとするものなら、こちらは人間と人間の言語を、それをとりまく外部との関わりで見ようとするものです。社会科学という側面をもっています。

言語学系英語学は英米文学専攻の中でだいぶ異質な感じのする研究分野でしょう。「文学」から切り離されてスタートしながらも、さまざまな周辺の（こちらから見たらね）学問分野の発展とともにそれらと接点を持ちながら拡張、変化してきたからです。大学によっては、文学と言語学は別の専攻や学科（家庭内離婚状態）になっているところも多いでしょう。それにも理があります。しかし、慶應英米専攻では、言語学は多少浮いてはいるものの（井上の人格的問題か？）、文学とともに学びます。そして、それは意味があることです。言語も文学も心の働きや社会と切り離しては考えられません。もちろん、文学研究と言語研究ではアプローチはだいぶ異なりますが、その根底の部分でつながっているというのがこの専攻のスタンスです。

たとえば、上のメディアと言語の関わりも、テクノロジーと言語の関わりも、文学のテーマでもあり、社会言語学(社会科学系の言語学)のテーマでもあります。Samuel Johnson の高尚な議論も、インターネット、ケータイ、スマホがもたらした知の変化

も、それらによって伝えられる日常のどーでもいいことばたちも、社会言語学から見ればつながっています。さらに言えば、のちにお話になる堀田先生のご専門の philology、歴史言語学も社会言語学的な推理ゲームという側面があると思います。慶應英米文学専攻は、このような事象に、一つのつながりを根底にもちながら多角的で多様に取り組むことができる場です。

メディアと言語の関わりと言えば、わかりやすい例として、書かれたものと話されたものとは、おのずと内容が変わったりスタイル（文体）が変わったりしますね。たとえば、インターネット動画というメディアを用いればこんな感じです。YouTube 初参戦（笑）

[おまけ（？）動画](#)

次はアメリカ文学の大串尚代先生です。お楽しみに。